

## 被災地派遣レポート〈第22回〉

福祉保健局障害者施策推進部計画課 下川 朝子さん

私は、6月20日から27日まで福島県災害対策本部事務局要員の第二陣として派遣されました。

初めて訪れた福島市は、連日報道で目にしているような重々しい雰囲気ではなく、街の人達は東京と同じように普通の生活を送っているように見えました。放射線を気にしてマスクを着けている人もほとんどおらず、純粋に驚いたのを覚えています。

派遣初日は、まず現地事務所にてガイダンスを受け、その後災害対策本部を案内してもらいました。災害対策本部があるフロアには報道陣がひしめきあっており、異空間に戸惑いでしたが、派遣終了時には記者達が廊下で寝転がっていても気にしなくなりました。

私は原子力班モニタリングチームに所属し、県職員のモニタリングの企画補助・データ整理等を行いました。具体的には、県内の学校・公園・児童福祉施設等の放射線量のホームページ公表用データの照合、線量マップの作成を行いました。データを見てみると、コンクリートよりも土壌・草地のほうが値が高く、またホットスポットと言われている地域では建物内でも高い値が出ていました。対応は急務ですが、表土除去をしても除去した土の持っていく先がない等、解決までに長期間かかる問題であると痛感しました。

同じ被災地である宮城県、岩手県は時間の経過とともに着実に一歩ずつ復興へと歩んでいます。しかし、福島県は原発問題の終息の目途がまったく立っておらず、復興への道筋が未だ見えていない状況です。原発を心配し県外へと出ていく住民、原発問題以降撤退する企業が多かったために県内では働き口がほとんどないこと、原発は健康上の影響だけではなく福島県に経済・雇用など多くの問題をもたらしました。また、津波の被害を受けた沿岸部の修復も滞っています。

現地に派遣されたことで、なかなか報道はされていないけれども住民を悩ませている深刻な問題を認識することができ、また実際にそこに住んでいる方々から原発への思いを聞くことができ、大変貴重な体験となりました。そして、これまで福島原発により恩恵を受けてきた一都民として、福島県の復興に尽力したいと更に強く思いました。派遣期間は終了しましたが、福島県の物産品の購入や率先して節電に協力する等、微力ではありますが一都民としても福島県の復興にこれからも貢献していきたいと思えます。